

サロベツ原野と称されるのは、天塩川の
下流、幌延と天塩とを結ぶ線から北にかけ
て東西約五km、南北約二〇kmにわたってひ
ろがる、ほぼ矩形の泥炭地を主体とする区
域である。この泥炭地は、その周縁を流れ
るサロベツ川、上エベコロベツ川、下エベ
コロベツ川およびオトンルイ川などによつ
て灌漑されており、融雪期の氾濫によつて
大きく冠水する湿潤なところである。池沼
としては中央部付近にペンケ、パンケの二
湖を有するほか、長沼など二、三の半月湖
がある。東と北とは低い丘陵に接しており
西は幅約二kmにおよぶ数列の砂丘帯を介し
て日本海に面する。

泥炭地は元来、天塩川河口に砂丘列の発
達に伴って成立した古サロベツ湖を母体と
する。湖の淡水化および泥炭の堆積はとこ
ろにより必ずしも一様ではなく、したがつ
て現在の泥炭および泥炭地植生の分布も、
また部分的に異なっている。

砂丘列は、カシワ・モンゴリナラ林およ
び針広混交林におおわれ、列間には狭く長
い沼、あるいはこれの干上がった湿地がみ
られる。第一砂丘には不完全な海岸草原が
あるが、放牧あるいは耕作によつて植生は
破壊され、自然状態の保たれているところ
は少ない。

泥炭の埋蔵分布からみると、丸山北西部

に高位泥炭の主たる中心を有し、これを囲
んで中間および高位泥炭地がほぼ同心円状
にならんでおり、サロベツ原野中、もつと
も均質な分布を示すところである。

このほぼ中央に位置する丸山は、円形、
島状の洪積台地で、古くから開拓が進んで
いるが、なお周縁に若干のアカエゾマツ林
と、針広混交林(トドマツ・エゾマツ・ハ
ルニレ・エゾイタヤ・センノキ・ヤチダモ
・ナナカマド・キタコブシ・ハンノキな
ど)を残している。前述のように、下エ
ベコロベツ川は原野中央部の南東角から、
いったん北に流れ、落合でサロベツ川と合
して地区の北端でアチャル丘陵に会し、こ
れから地区の西縁をなしつつ南下する。河
畔には自然堤防が形成されており、ヤチダ
モ・ハンノキ・ナガバヤナギを主とする河
畔林と、オニシモツケ・オオイタドリ・エ
ゾモギなどを主要素とする群落がみられ
る。

以上を要するに、主として地形上からの
区分としては、砂丘帯、湿原主部、丘陵の
三つが挙げられる。

砂丘列は海岸草原、風衝型カシワ、モン
ゴリナラ林、砂丘列間湿地と針広混交林よ
り成る。針広混交林にはトドマツ・エゾマ
ツ・アカエゾマツ・ミズナラ・エゾイタヤ

・ナナカマド・センノキ・シラカバ・コシ

アブラ・ホウノキ・キタコブシなどがみら
れる。

湿原は、河畔林および若干の河岸草地、
並びに湿原主部の群落に分けられる。湿原
主部はホロムイスゲ/ツルコケモモ/ミズ
ゴケ群落に代表される高位泥炭地植生、ヤ
チヤナギ/ヌマガヤ群落に代表される中間
泥炭植生と、ヨシおよびイワノガリヤス
を主要素とする低位泥炭地植生より成る。

丘陵は主として針広混交林の占めるとこ
ろであるが、伐採もしくは野火を被むつた
ところでは、シラカバを主とする広葉
樹林が優勢である。

サロベツ原野は釧路湿原と並んで北海道
というより日本の最も代表的で、最も大き
い(面積約二万ha)低地の湿原として知ら
れている。その広さの故をもつて開発の対
象ともされ、自然保護地区や国立公園の候
補地にもなった。実際、利尻・礼文国立公
園にサロベツ原野の一部が加えられる国立
公園になったわけだが、これも開発との
「分け取り」か、陣取り合戦のように見え
る結果になった。これからの「サロベツ」
は、さらに(その変化をめぐって)むずか
しい問題を抱えることになるだろうと思わ
れる

(北大農学部附属植物園)

サロベツ原野

辻 井 達 一

